

TE Sが貢献できること

杉山昌之

1. はじめに

私は数年前にTE Sを取得したが、正直言って取得後にこの資格の優位性を享受したことは余り無い。それはこの資格が、繊維業界ではある程度知名度はあるものの業務独占資格ではないからである。では、TE Sである我々はその存在意義を主張し、繊維業界に対して貢献するにはどうすれば良いのか。

私は繊維業界の現状を振り返りながら、下記のように考えてみた。

2. 日本の繊維産業の現状と問題点について

(1) 繊維市場の現状：日本の繊維市場では中国等からの輸入品が増加しているが、衣料品については数量ベースの輸入浸透率に比べ、金額ベースの輸入浸透率はまだ低い。即ち、高付加価値品であれば、まだ国内生産で勝負できる分野が残っていると考えられる。

(2) 繊維産業の構造的な問題点：日本では、川中・川下に中小企業が数多く乱立する。このため企業数の多さゆえ、商品の売れ筋を最も敏感にキャッチする川下から川中、更には川上への情報の流れが悪い。その結果、見込み生産が増え、在庫過剰に陥りやすくなっている。

(3) 川中の体質的な問題点：過去、繊維産業に対する日本政府の対応は、育成政策より保護政策を重視してきた。その結果、特に川中企業では賃織・賃加工体制からの脱却が遅れ、分断された生産構造の中で、リスクへの責任が曖昧となり、産元・商社への依存体質が残る。

(4)人材の繊維製造業離れ：繊維産業は若者の中では斜陽産業のイメージが強く、就職を希望する者が少ない。また企業も、繊維部門への開発投資を減らす方向にあり、技術や技能の継承が困難となりつつある。

(5)繊維市場規模の縮小：我が国は今後も少子高齢化が進むと予測されており、ファッション性の高い衣料品を購入する層は確実に縮小する。

3. 繊維産業の存在意義について

(1)経済の高付加価値化に寄与：生活文化を豊かにする繊維産業は、感性価値創造産業として、ライフスタイル関連市場に様々な商品を提供することができる。

(2)川中の重要性：アパレル製品の付加価値は、使われる生地素材に大きく影響される。高付加価値品を企画・生産するためには、生地・素材開発を担う川上・川中の役割は非常に重要である。即ち、川上～川下が連動し効率良く流れるためには、川中の活性化は不可欠であり、その存在意義は大きい。

(3)新規技術開発基盤：繊維産業は、今まで培った素材開発力やリサイクル技術を生かすことにより、またクールビズ等環境調和と快適性を両立させる技術により、これからの循環型社会に貢献することができる。

4. 未来の繊維ファッション産業とT E Sの役割

(1)産地の活性化推進：特に川中では、中小企業が産地毎に閉鎖された集積状態となっている。各企業はそれぞれ優れた独自技術を持つが、産地間の情報交換が不十分で、技術が有効に活用されていないケースがある。これらの間を埋めるコーディネーター機能が欲しい。

(2)川上・川中・川下の連携推進：高付加価値品が生まれるためには、企画、設計開発、製造、商品管理がバランス良く機能しなければならない。しかし、糸・生地・アパレルが分断されていけば、システムとしての力が発揮されない。川上～川下を「チーム」として機能させるよう、連携を強化するべきと考える。

(3)環境配慮商品の開発：地球環境保全が叫ばれている中、今後の商品開発において環境配慮の考え方は避けて通れない。特に中国等の途上国は、環境問題について消極的な姿勢が目立つため、この分野で先手を取る事は、環境配慮という付加価値に対して優位な立場に立つことができる。これを技術面でサポートしたい。

(4)市場の拡大化：日本の繊維製品は、特有の感性と高い技術力によって作られ、こだわりを持つ日本の消費者に受け入れられてきた。これらを、富裕層が増えたアジアを中心とする海外市場へ展開して行きたい。一方国内市場には、高齢化社会に対応するため、ユニバーサルファッションの思想に基づいた商品開発を進めたい。

(5)人材の育成：産学官連携に加え、繊維関連学会や技術士会なども協力して、教育啓蒙活動を充実する。今や、繊維関連企業内で人材を育成することが難しくなっている。我々T E Sは、とにかく繊維の「基本のキ」を教育する事業を、それこそ手弁当で協力するくらいの気持ちでやっていくべきである。

これらのことを総合的に実行するには、例えばイタリアの「インパナトーレ」のような存在が必要となってくると思われる。幸いT E Sには、川上から川下までの製造企業、その製造をサポートする付属品・クリ

ーニング業者、それら製品を的確に評価する第三者機関等、さまざまな知識と経験を持つ多彩な人材が揃っている。

我々 T E S 有資格者は、一人ひとりではその活動に限界があるかもしれないが、それぞれが自らの強みを生かした「チーム」として活動することにより、業界のいかなる問題に対しても的確に対応することができると考えている。これからの T E S は、日本のインパナトーレ・チームとして活躍できる環境を整え、繊維業界の活性化を推進していくべきではないだろうか。

以上

参考文献

「繊維産業の展望と課題」～経済産業省

「日本の繊維産業 なぜこれほど弱くなってしまったのか」～伊丹敬之著 N T T 出版